

ドイツ在住のオトルコ女性の変容体験：自伝的語りのインタビューへの事例媒介的アプローチ

著者	水野 節夫
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	46
号	1
ページ	65-85
発行年	1999-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015086

ドイツ在住の一トルコ女性の変容体験

—自伝的語りのインタビューへの事例媒介的アプローチ—

水 野 節 夫

1. はじめに—分析手続きの説明—

ここでの課題は、「ドイツのある都市在住の一トルコ女性ヒュルヤ（Hulya）さんとの語りのインタビュー」という素材をばくなりに分析・解釈してみせることである¹⁾。その際の基本的分析視角は、ぼくが‘個人’現象と呼んでいるものを探り出してくるというものである。つまり、素材の中に読み取れる限りでという条件つきで、ヒュルヤさんという一人の個人に関わる主要な諸特徴を浮き彫りにするということである。こうした視角から先の素材の検討に入る前に、あらかじめ次の2点について触れておきたい。一つは、対象素材の料理の仕方、素材への接近の仕方についてのぼくの基本的な考え方。もう一つは、先の素材を相手にした時、この基本的考え方に則って実際にどういった分析・解釈観点を思いつき、どういった分析・解釈作業を行なったか、その概要についてである。

a. 事例媒介的アプローチの典型的な分析作業について

まず、第1点から始めよう。ぼくの分析の仕方は、ぼくが《事例媒介的アプローチ（case-mediated [CM] approach）》と呼んでいるものである。「事例媒介的アプローチというのは、《(a) 先ずある研究対象の事例を特定化したうえで、(b) その個別具体的な事例の解明を第一次的課題として設定し、(c) この課題の達成を通じて間接的に研究対象への接近を試みようとするやり方》のことである」（水野 [近刊予定]）。

このアプローチが前提にしているのは、対象とする素材についての理解が一定水準にまで達したことを確認した上でないと、個別具体的な事例の解明には進むべきでないという考え方である。これをぼくは、〈素材対象の概念化と《現象》の概念化という二重の概念化〉という形で定式化している。素材対象の概念化というのは、素材対象の理解を深めるために行なわれる分析作業のことで、主要なものとし

てはすぐ後に見るような意味での《なぞり/なぞり返し》を中心とした一連の作業がある。《現象》の概念化とは、個別具体的な事例の解明との関わりで分析者自身が興味を持っていたり重要な意義/意味があると考える《現象》と主題的に取り組み分析していく作業のことで、ここにも、これまた後に説明するように、《生み出す》作業を媒介にしながら展開されていく一連の作業がある。要するに、事例媒介的アプローチにおける分析プロセスについての基本的イメージは、《なぞり/なぞり返し》を通じて生み出されてくるはずの対象素材の理解の深化のプロセスから始めて、その過程で生起することが期待されるアイディアや洞察を足掛かりにしながら、徐々に《現象》の包括的把握に進んでいくというものである。

こうした二重の概念化の発想についての議論を踏まえた上で、ここではこのアプローチの典型的な分析作業として次の6つをあげておく。それらは、(1)《なぞる/なぞり返す》、(2)《生み出す》、(3)《膨らます/結びつける》、(4)《はっきりさせる》、(5)《チェックする》、(6)《組み直す》の6つである。

(1)《なぞる/なぞり返す》というのは、素材対象の内実についての見通しを得ることに照準を当てながら、素材対象を丹念に跡づけ/跡づけ直すことである。この作業を行なうにあたっては、次のような2つの原則を踏まえておくことが大切である。まず第1は、素材対象に《即す》という精神に由来するもので、素材対象と即事象的に(sachlich)ていねいにつきあうことである。これは、〈《即す》の原則〉と呼ぶことができるだろう。もちろん、素材対象にどこまで《即せる》かは、分析時点での分析者本人の力量の関数である。しかし、その姿勢を持っている(もしくは持とうとする)こと、徐々にでもこの《即す》の発想が分析者本人の思考世界に入っていく根づいていくように努力することは極めて大切なことなのだ。第2は、何回も素材対象の《なぞり》を繰り返すことで、こちらは〈《繰り返す》の原則〉と呼ぶことにする。これは、より正確な——つまり、素材対象との対応関係をより密着したものにもっていく形の——《なぞり》に近づけるために必要な作業である。

それでは、なぜ《なぞり/なぞり返し》作業をするのか？ あるいは、なぜ素材対象を何度も跡づけるのか？ これには色々な答え方がありうるだろうが、ここでは大きく言って次の5つを想定しておく。つまり、

- (a) 概念レベルで素材対象の主要部分(=骨格)を浮かび上がらせたいから、
- (b) 概念レベルで素材対象の主要部分の相互関係(因果・影響関係を含む)を浮かび上がらせたいから、

- (c) 概念レベルで素材対象の主要な筋を浮かび上がらせたいから、
- (d) 概念レベルで素材対象の主要なプロセス・流れを浮かび上がらせたいから、
- (e) 概念レベルで素材対象の主要な時間的推移を浮かび上がらせたいから、

の5つがそれである。要するに、《なぞり/なぞり返し》の作業の狙いというのは、こうした5重の意味で素材対象についての目鼻を徐々につけていくことと言っている。

今度は《なぞり/なぞり返し》作業をすることの効果について簡単に触れておこう。ぼくの見るところ、《なぞり/なぞり返し》作業の効果としては次の3つをあげることができる。第1は、素材対象への《なじみ》効果である。つまり、この作業を続けていると、否応無く対象素材の様々な側面・内実・性質などについて深く知るようになるということである。言い換えると、この作業は、なじみがないか薄い対象素材になじんでいく際の基本的なやり方なのであり、この《(対象素材に)なじんでいく=(対象素材の)理解を深めていく》ということを分析・解釈の際の第一歩として自覚的に位置づけておくことは、非常に重要なことだとぼくは考えている。第2は、《現象》の概念化作業における一種のはずみづけ(=ウォーミングアップ的)効果である。これは、《なぞり/なぞり返し》作業の副次的効果とでも言えるもので、この作業を通じて対象素材の反芻を続けていると、対象素材に関わる思索を刺激することになり、《現象》の概念化作業にヒントを与えてくれる可能性を準備することになるのである。第3は、《ひらめきポテンシャル》促進効果である。これは、第2の効果であるはずみづけの延長線上に生み出されてくる可能性をより積極的に定式化したものと見なせるもので、別の言い方をすれば、《なぞり》の繰り返しのプロセスは、《ひらめき》が起こりやすくするための仕組みとして活用できるということである。

どういう事情から《なぞり/なぞり返し》作業がこうした3重の効果を持ちうるのかという点について敷衍しておけば次のようになる。分析者にとって分析の対象素材は、ほとんど常に、《既知部分》と《未知部分》とからなる。したがって、対象素材について《なぞり》を繰り返すということは、事実上、両者のバランスを変化させていくことを意味している。つまり、《なぞり》を繰り返していると、傾向的には、《なぞり》対象の《既知部分》のさらなる拡大と《未知部分》のさらなる縮小という形での両者のバランスのシフトが起こってくる。こうしたシフトが生み出されてくるからこそ、《なぞり/なぞり返し》作業の効果1: 素材対象に《なじむ》ことになるはず》と言えるのである。そしてこのシフト生起の帰結は、(i)

《未知部分》への注意集中力が高まる、(ii)《ひらめきポテンシャル》を促進するエネルギー量が増える、の2つである。こうした事情から、出来事としての《ひらめき》が生起する確率が高まることになるのではないかというわけだ。

(2)《生み出す》とは、アイディアや洞察、ひらめき、着目点、対象への切り込み方などをまさに生み出してくることである。この分析作業は、すぐ上で述べたように、実際は(1)の《なぞる/なぞり返す》の作業と平行して行なうことになるものであり、素材の分析・解釈の立ち上げにあたっては、《なぞり/なぞり返す》作業に劣らず大変重要な位置を占めている。ここでは分析者の側の《ひらめき》、《思いつき》が重要な意味をもって来る。ぼくは〈地震計の針〉の比喩を用いて説明することにしているが、対象素材を《なぞる/なぞり返す》ということをしていると、〈針〉が様々な揺れを示すところが出てくるもので、そうした個所はさまざまな意味で分析者の側の〈何か〉を刺激してくれているわけだから、そうした揺れの個所のうちとりわけ大きく揺れるところを中心にして、分析者を刺激してくる個所の内容をつかまえていく努力をすることが——それは、具体的には、その時点で《思いついたこと》や《ひらめいたこと》をすぐメモる形で言語化していく作業を意味することになるが——基本姿勢として大変重要とされる。これは、ぼくが分析作業の腕を磨く上で圧倒的な影響を受けてきたアンセルム・ストラウス (Anselm Strauss) さんが〈オープン・コード化〉と呼んでいるやり方の中の、いわば中心的作業の一つにあたるものである²⁾。

ここで先にあげておいた基本的分析視角とこの《生み出す》という作業における《思いつき》との関連について触れておこう。この《生み出す》という作業に見いだされる《思いつき》や《ひらめき》自体は、分析者が自分の拠って立つ分析視角を十分に自覚していようがまいがそうしたことは関わりなく、分析者と素材との相互作用の過程で生起してくる傾向を強く持っている、というのがぼくの基本的考え方である。言い換えれば、素材を有意味もしくは有意義なものとするためには、論理的に言って、何らかの分析視角の存在が前提とされるということを認めた上で、にもかかわらず、分析作業に先立って分析者がそうした分析視角をあらかじめ自覚している必要はない、ということである。つまり、素材の分析にあたっては、一方で、あらかじめはっきりとした分析視角を持っていたりもかまわないが、他方では、素材と格闘していく中からつかみとってくる分析視角というものもありうるというのがぼくの立場である。しかもこの後者こそ、《生み出す》という作業での《ひらめき》や《思いつき》に由来する分析視角ということになるはずのもので

あり、またこの後者との出会いこそが分析者をワクワクさせる源泉の一つなのである。

(3)《膨らます/結びつける》とは、すぐ上にあげた(2)の作業を通じて生み出されてきたいろいろなアイディアをいろいろな形でふくらませたり、精緻化したりすることである。この作業は、事実上、これまたストラウスさんの言う〈オープン・コード化〉や〈軸足コード化〉でやられている作業に対応していると思う³⁾。

(4)《はっきりさせる》とは、生み出され精緻化されてきたアイディアや洞察を言葉でもってはっきりと対象化することである。(2)や(3)の作業をやっている間は、そこで出てくるアイディア群は、非常にアモルフなものであってもかまわないとぼくは考えている。これらの、いまだ本人たちにもはっきりしない部分を含んだアイディア群のうち、重要そうに思われるところを意識的にはっきりさせること(=‘目鼻をつける’こと)が、ここでの作業である。この作業において大切なことは、問題のアイディアの中心部分と本人が考えているところをとにかくはっきりと対象化=定式化してみるということであって、仮にその対象化=定式化の仕方にブレが起きている場合でも、それは後に修正すればいいんだという気持ちでこの作業をやればいいのである。

(5)《チェックする》とははっきりと定式化したアイディアや洞察がブレていないかどうかを点検することである⁴⁾。すぐ前の(4)の《はっきりさせる》というのは、ある意味で、自分の思いついたアイディア群についての自己理解を提示するわけだから、その意味で一種の仮説を提示している、と見なすことができる。この《はっきりさせる》=仮説の提示という議論との関連で言えば、《はっきりさせる》作業でやろうとしているのは、そうした仮説の検証作業と言ってもいいかもしれない。

(6)《組み直す》とは、(4)で対象化=定式化したアイディア群を(5)での作業の成果を踏まえて《組み直す》作業のことである。この(6)の作業は、(4)の改訂版にあたるわけだから、(4)の対象化=定式化に比べれば、より正確・精緻なものになっている確率は高いけれども、一度で完璧なものができあがるという保証はないという点には注意を促しておきたい。つまり、(6)の作業を経たとしても、それでもなおその再定式化されたアイディアがブレているということは大いにありうるのであって、そうした場合には、また(5)の作業を経て、(6)の作業を今一度(場合によっては何度でも)行なうということになる。

1 b. 〈実際の分析・解釈作業の概要〉

今度は第2点の〈実際の分析・解釈作業の概要〉の説明に移ろう。まず、《なぞる/なぞり返す》の作業並びに《生み出す》作業を通じて思いついてきたアイディア群に触れてみよう。

さしあたりの分析作業方針としてぼくが採用したのは、(1) 時期区分のアイディアと(2) 重要そうな言葉や表現、エピソードを見つけ出し特定化してくるというアイディアの2つであった。

(1) 時期区分のアイディアというのは、一般的には何らかの観点を設定することによって対象素材を年代を追って並べあげていった時に浮かび上がってくるように分析者に思われる節目を確定していく作業のことで、ここでは、ヒュルヤさんが語る生活体験を跡づけながら、彼女にとっての人生上の節目らしきものを確定してくる試みのことを指す。この発想で素材とつきあっていく中からぼくが注目したのは、〈3つの日付〉と〈5つの時期〉であった。

ここで〈3つの日付〉というのは、1972年7月5日と1979年5月28日と1986年2月6日の3つで、それぞれ、〈ヒュルヤさんがドイツに到着した日〉、〈彼女の給料が2マルク下がった日〉、〈インタビューのあった日〉にあたる。最後の〈インタビューのあった日〉はともかくとして、〈ヒュルヤさんがドイツに到着した日〉と〈彼女の給料が2マルク下がった日〉については、すぐ次の時期区分の検討にあたってはそれなりに留意しておく必要があるように思う。というのも、彼女が数ある日付のうち、わざわざこの日付に言及しているということは、これらで区切られている日付そのものかその前後が彼女に強烈な印象を残していた可能性が高いからである。

次に〈5つの時期〉というのは、まさに時期区分の観点からする対象素材の分節化の成果であって、大きくは次の5つの時期を析出することができた。それらは、

〈第1期〉：ドイツ到着より前の時期

〈第2期〉：ドイツ到着の日からの1年間

〈第3期〉：ドイツ滞在2年目から4年目までの時期

〈第4a期〉：4年目の休暇で結婚した時から給料が2マルク下がった日までの時期

〈第4b期〉：4年目の休暇で結婚した時から離婚成立の日までの時期

〈第5a期〉：その後、《私の話はこういったところです》と一応話が終わったところまでの時期

〈第5b期〉：全体を振り返りながらインタビュー現在時点からさまざまなコメントを述べている時期

ということになる。

次に(2) 重要そうな言葉や表現、エピソードを見つけ出し特定化してくるというアイデアについて言えば、テキストの中に出てくる言葉・言い回し・表現のうち、《なぞる/なぞり返す》という作業をしている過程でいわば‘目に飛び込んできたもの’や、読み方次第では重要になるかもしれないという予感を与えてくれるもの、あるいは彼女の人生行路を考えていく上では外せそうにないもの等など、こちらのアンテナに引っかかってきたものをいわばしらみつぶしに書き出してきたものであって、時期区分の作業の成果も組み込むという意味も込めて、各事項の後ろにどの時期のものかを書き込んでおくことにした。第1表はその結果の一部（最初の部分）である。

これらの作業をする過程でさらに思いついたのが、(3a)《〈初めの状態（＝ドイツに来る以前のヒュルヤさんがおかれていた状態）〉 vs. 〈現在の状態（＝インタビュー時点での彼女の状態）〉》の対比と(3b)《どのようにして〈初めの状態〉か

第1表 重要そうな言葉、表現、エピソード

1	「私たちにはまったくお金がありませんでした」(第1期;p.3, l.28)
2	「私の夢は、両親が年をとった時に大部分のお年寄りの人たちよりも暮らし向きがよくなることでした」(第1期;p.3, l.40-l.41)
3	「私のお母さんは自分自身のお金というものも、それから自分自身の住む家ももっていなかったのです」(第1期;p.3, l.44-l.45)
4a	「私もドイツへ行きたいのです」(第1期;p.3, l.48)
4b	「……お父さんはいつもこうばやいていました。『いや、お前はドイツへは行かないんだ。お前はここにいるんだよ。いつか結婚する日がやってくる。そしてお前のダンナがお前の面倒を見なくてはならないことになるんだよ』」(第1期;p.3, l.49-l.50)
5	「私は何とかして[兄から]独立していたかったんです」(第1期;p.4, l.1)
6a	《〈実際よりも年を取っているようにしてもらおう〉というエピソード》(第1期;p.4, l.11-l.25)
6b	「父はほんとにプライドが強かったのです」(第1期;p.4, l.18)
7	《〈イスタンブールでの非人間的・屈辱的体験〉のエピソード》(第1期;p.5, l.5-l.36)
8	「言葉についてもお金についても知識が無くて……」(第2期;p.6, l.7)
9a	《〈会社を清掃するように命令される〉というエピソード》(第2期;p.6, l.45-p.7, l.36)
9b	「[無理やり清掃の仕事させられた]後には何のプライドも残っていませんでした」(第2期;p.7, l.3)
10	「[命じられた]仕事は終えておかなければなりませんでした」(第2期;p.7, l.35)

ら〈現在の状態〉へと変化していったのか」というアイディアであって、この時点で、テキストで言えば、p. 17 の 34 行（つまり、ヒュルヤさんが「私の話はこういったところです。これが全人生です・・・」という前のところ）までについては、大ざっぱな見通しをつけることができたのである。

そして、細かい作業を別にすれば、最後に取り組んだのが、第 5b 期のコメント群であって、これらは（4）〈内省的思索群についての分析〉という形で検討を加えることにした。そしてこの場合も、後に詳しく見るように、（2）の作業でリストアップしておいた項目は重要な示唆を与えてくれることになる。

では以上の概要説明を踏まえて、（3a）以下のアイディアについて、より具体的な中身の検討に入っていくことにしよう。

2. ドイツのある都市在住のトルコ女性ヒュルヤさんの 変容体験⁵⁾ の検討

2a. 《〈初めの状態〉 vs. 〈現在の状態〉》

このテキストを何度も読み直していて徐々に気がついてきたことは、回想の形で
ではあれ、ドイツに来る以前のヒュルヤさんの物の考え方とインタビュー時点での
彼女の物の考え方との間には大きな断層があるらしい、ということである。そのこ
とは、例えば、「〔トルコに帰って生活するということに触れながら〕ずっと前だっ
たら、15 年前だったらそうしていたでしょうね。でも、現在——つまり、自分の
ことは自分で面倒を見るというのでこんなに長い間やってきて、しかも自分が自分
の主人でずっとやってきている現在ということですが、——〔誰かに〕依存した生
き方をするぐらいなら自分の命を断ってしまった方がましですね。つまり、そうし
たことはもうできないということです」 [p. 18, ll. 34-36; 下線は原テキストでの強
調を示す] といった発言からもうかがい知ることができる。そこでぼくがやってみ
たいと考えたのは、この対照をもっとはっきりさせてみるということだった。つま
り、第 1 期の、とりわけ前半部分でのヒュルヤさんの発言の中から際立ったもの
を選び出し、第 5b 期の彼女の発言の中にこれに対応するものを探るというやり方
がそれである。その結果、次の 6 つの観点を設定すれば、両者の対照を浮き彫り
にできるように思われた。それらの観点とは、(a) 《お金》；(b) 《ドイツ》；(c)
《彼女の夢》；(d) 《彼女の目標》；(e) 《‘脱出’についての考え》；(f) 《外の世界
についての知識量》の 6 つである。第 2 表は、これらの観点から見た場合の 2 つ
の状態の違いを表にしたものである。

第2表 〈初めの状態〉と〈現在の状態〉との対比

		トルコにいた時の状態	ドイツにいる時の状態
(a)	《お金》	「私たちにはまったくお金がない」	{私にはいくらかお金がある}
(b)	《ドイツ》	「私もドイツに行きたいです」	{私はドイツに留まるでしょう}
(c)	《彼女の夢》	{家族に貢献すること}	「彼女自身のために生きること」
(d)	《彼女の目標》	「[兄から] 独立すること」	{独立という目標は達成されるが 新たな目標はあいまいなまま}
(e)	《'脱出'についての 考え》	{ドイツに行って働くこと}	「出口なし」
(f)	《外の世界につい ての知識量》	{何の知識もない}	{よく知っている}

注記：「」は原テキストからの引用を、また{ }はぼくの側での解釈・要約を示す。

ドイツに来る以前のヒュルヤさんのおかれていた状態は次のように言うことができるだろう。この当時ヒュルヤさんは家族の一員としての発想を自明のこととしていたわけだが、そうした彼女にとっては、父親が病気になって以降の家族の状況は貧しさの象徴としての《お金なし》の状態として意識され(→(a)), その解決策としてドイツへの出稼ぎが位置づけられている(→(e))。また《ドイツへ行く》ということは、一方で彼女個人にとっての憧れ・願望であり(→(b)), 本人の独立志向を現実化させてくれる有力な手段でもある(→(d))。が、他方でドイツ行きの夢はあくまで家族成員としての性格をもおびている(→(c))。そして、そうした〈家族志向的〉な発想を支えていたのが、《外の世界》についての知識を持たないまま(→(f)), トルコ社会という閉鎖的情報空間の中でその慣習や思考様式に見事なまでに浸って生きていたという事情である。

他方、インタビュー時点での彼女の状態は、たとえば、今やいくらかのお金を持っており(→(a)), 働き口がある限り何とかドイツに留まるつもりではいる(→(b))。一応経済的・精神的独立志向が実現されてはいるが、いわばそうした生活目標の実現とは対照的に、人生目標の方はあいまいなものになっている(→(d))。彼女の夢はもはや家族の一員としてのそれではなく自分自身のために生きる(→(c)) というものだが、しかし、トルコ社会とドイツ社会という両方の《外の世界》についての知識を持っている(→(f)) 本人の現状認識からすると、《離婚女性》という彼女自身がおかれている現状は、否応なく、《出口なし》の状況と考えざるをえないものなのである(→(e))。

2 b. 〈初めの状態〉から〈現在の状態〉への変容過程の跡づけ

今度は、どのようにして〈ドイツに来る以前の彼女の状態〉から〈インタビュー時点での彼女の状態〉へと変化していったのかという点を検討することにしよう。先にあげておいた5つの時期のうち第1期から第4期までの間にヒュルヤさんに起こったエピソード、彼女のとした意識的動き、彼女の価値観や病気・手術等の予期せぬ出来事等を考慮に入れるなら、ぼくとしては次のような4つの局面を区別する形で彼女の変容プロセスを跡づけていくことができるように思う。

第1局面 [p. 5, l. 5–p. 5, l. 50] はヒュルヤさんの《イスタンブール体験》の局面とでも呼べるもので、彼女は移住の手続きをするために兄に連れられて生まれて初めてイスタンブールという大都会に出かけ、4日間にわたって徹底的な検査を受けている。その過程で彼女はすでに一種の異文化体験とそれがはらむ価値観のぶつかりあいという問題に直面させられている。

第2局面 [p. 6, l. 2–p. 11, l. 37] は彼女の《ドイツ体験》局面で、これはより細かくは、第2a局面（ドイツ滞在1年目）と第2b局面（ドイツ滞在2年目から4年目まで）とに分けられる。ヒュルヤさんにとってのドイツ原体験が第2a局面に集中していることは言うまでもない。

第3局面 [p. 11, l. 39–p. 15, l. 24] は《トルコ回帰志向》局面である。ここには、彼女が踏み出した結婚の動きや、彼女を襲った予期せぬ出来事（＝突発的な病気と3回の手術）、さらにはそうした中で強烈な帰郷願望（「私は無性に故郷に帰りたかったのです」）につき動かされながら、夫の元にではなく母たちのもとに帰るという彼女の動きとその一帰結としての離婚が見てとれる。彼女の現在（＝インタビュー時点）のありようを大きく方向づけたのは、この局面での彼女の動きといくつかの予期せぬ出来事、そして彼女なりのそれらの受けとめ方だったと言えることができるだろう。

そして第4局面 [p. 15, l. 26–p. 17, l. 5] は、《ドイツ定住決意後》局面であって、彼女は、ドイツに留まりながら生きていくことを決意した後、さまざまな形で積極的な動きを見せ始めることになる。

それではこれら4局面の各々について、より細かく見ていくことにしよう。

第1局面：《イスタンブール体験》の局面

この第1局面で特記すべきことは、移住手続きの一環として行なわれた検査の場での文化的ショック体験である。彼女はこの点を「イスタンブールでは私たちは

単なる番号に過ぎませんでした。もうパーソナリティーを持った存在ではなかったのです。」[p. 5, l. 11] と的確に言い表している。ここで彼女は、事実上、自分の埋め込まれていた文化に根ざした価値——それは、後に第 2a 局面で自覚することになる「まとまって一致団結することの大切さ(〈the value of sticking together〉)」とも共鳴するはずのものだが——と、何事も数字で割り切っていく価値とのぶつかりあいに直面していたのである。この非人間的な扱われ方は、その後のドイツでの体験を先取りするものであったわけだが、こうした屈辱的体験にさらされて検査に合格するしか、貧しさから抜け出す道——彼女は「唯一の出口/脱出口」(p. 5, l. 28) という表現を使っている——はなかったのである。

第 2a 局面:《ドイツ体験》局面 (その 1); ヒュルヤさんのドイツ原体験

第 2a 局面の特徴としては、次の 6 点をあげることができるように思う。第 1 は、彼女がドイツ到着後投げ込まれた状況であって、これは、金もない・言葉 (= ドイツ語) も話せない・知識もない [p. 6, l. 7] という〈3 ない〉状況であった。第 2 は働かされ過ぎである。つまり彼女を待ち受けていたのはニワトリ屠殺工場での (流れ作業を中心とした) 仕事につぐ仕事の連続であって、この苛酷な労働の毎日に身をさらした彼女には何らのプライドも残されていなかった [p. 7, l. 3]。第 3 点としては、労働条件の酷さを象徴する 4 つのエピソードをあげることができる。一つ目は、流れ作業の現場にたまたま置かれていたナイフが彼女の足に刺さってしまい、これに動揺した彼女がその場で治療を訴えたにもかかわらず、軽くあしらわれてしまった《足に刺さったナイフ》のエピソード [p. 7, l. 38-p. 8, l. 14]。二つ目は、手押し車に挟まれて彼女の手が腫れ上がってしまったので、それを現場の主任操作員に見せたにもかかわらず、「悲劇ではない」という一言で一蹴されこれまた放置されてしまった《悲劇ではない》のエピソード [p. 8, l. 16-l. 30]。三つ目は、移民労働者の労働条件の調査に本国から派遣されてきたはずの役人が、会社側の接待にうつつを抜かすばかりで、例えば、寮に立ち寄って彼女たちの声を吸い上げるといったこともせず、いいかげんな報告書を引っ提げてトルコに帰って行ってしまった《トルコから派遣された男》のエピソード [p. 8, l. 32-p. 9, l. 2]。そして最後は、滞在 1 年目の契約切れの時点になってはじめて滞在許可証なしで働かされていたことが判明した《滞在許可証なし》のエピソード [p. 9, l. 11-l. 41] である。そして第 4 点は、これらのエピソードの中に見え隠れする労働環境上の仕組みである。つまり、第 1 の《足に刺さったナイフ》のエピソードが示唆して

いることは、言葉が通じないのをいいことに、けがをした後のフォローアップの体制のないままに放置していることができるという意味で、会社レベルでの福祉厚生
の仕組みが構造的におかしいということである。第2のエピソードは、流れ作業
の主任操作員の無責任な言動がまかり通ってしまう体制であるということの意味し
ており、第3のエピソードからは、〈見せたくないものは隠してしまう〉という会
社の体質と〈接待づけに甘んじて職務遂行責任意識をもっていないトルコからの派
遣役人〉の体質の双方を読み取ることができる。そして第4のエピソードは、滞
在許可証なしの状態ですら平然としていられるような会社の体質を表している。言いか
えるなら、ぼくたちはこれらのエピソードのうちに、労働時間についての規制もな
く従業員を無権利状態に放置しておいて初めて成り立つような会社の仕組みを見て
取ることができるように思う。第5点は、「本当の姉妹のような5人の少女たち」
[p. 9, l. 44] という表現にもうかがえるように、「まとまって一致団結することの
大切さ」に彼女自身が目覚めていることであり [p. 9, l. 43-p. 10, l. 18]、第6点
は、体重が70キロから50キロに痩せてしまったために故郷に帰っても誰も彼女
に気づかないほど自分の体を酷使することによってかろうじてなりたつ体制の中に
彼女は身を置いていたのだという事実である [p. 11, l. 21-l. 22]。そしてこの第5
点と第6点こそが、苛酷な労働条件の中でヒュルヤさんがかろうじて生き残れる
ことができた主体的条件＝事情だったとすることができそうである。

第2b局面:《ドイツ体験》局面（その2）

第2b局面については次の2点に触れておこう。一つは労働条件の変容である。
つまり、彼女は第2a局面で行なっていたニワトリの屠殺処理の仕事から金属加工
処理会社での仕事へと仕事内容を変えている [p. 10, l. 23]。交替勤務を特徴とす
るここでの仕事は、第2a局面の時ほどの過重労働ではないにしても、「仕事が容
易でない」[p. 10, l. 31] ことに変わりはない。もう一つは、居住条件の変化とそ
のことに媒介されて生み出されてきた自分の価値観の再自覚化である。それまで5
人での共同生活をしていた彼女は会社の寮に移ることになるが、居住環境として見
た場合、この「寮はあまり素敵ではない」[p. 10, l. 44] のだ。これには、新たに加
わった年配者とのつきあい [p. 10, l. 50] の難しさに加えて、彼女が価値を置いて
いた「まとまって一致団結する」という雰囲気があるところでは見いだせない [p. 11, l. 7]
ということも関係していた。

こうした第2局面でのドイツ体験が彼女に生み出してきた主要な帰結は何だっ

たのか。それは、トルコ回帰志向と言っていいものであった。「私はドイツに帰ってきたくなどありませんでした。トルコへ帰って行きたかったのです」[p. 11, 1. 39-1. 40] という、この時期を振り返りながら述べている彼女の発言がそのことを象徴している。こうして彼女は第3局面に入っていくことになる。

第3局面：《トルコ回帰志向》局面

ぼくの読みからすると、この局面で見られる結婚へ向けての彼女の動きは彼女なりのトルコ回帰志向の現れなのだが、彼女の話を知っていると、この積極的に現状を変えようとする試みは、彼女の現在を規定する《最初の決定的な動き》と見なせるものである。そうした動きになるきっかけは、「ほんのしばらくでいいから、またドイツに帰っていききたいの」[p. 12, 1. 8] という結婚に際して彼女が夫になる相手に出した条件の内に胚胎していたと見なすことができるかもしれない。というのは、この条件は、ドイツに帰って行く彼女とトルコに離れて暮らす彼女の夫との間に構造的葛藤・対立を生み出してくることになるという意味で、結果的に彼女の未来のありようを左右する決定的な条件となってしまったのだから。

いずれにせよ、彼女は1年の約束でドイツに帰ってくる。そして3週間もしないうちにたてつけに予期せぬ出来事に出くわしている。といっても実際は、第2局面での構造的過剰労働の蓄積効果と言っていいものではないかと思うが、彼女は突然の病気に襲われてしまい、3度にわたって相当深刻な手術を受けているのだ。そして2度目の手術の際、彼女は子供を産める体を取るか自分の人生を取るかの決断を迫られることになる。この時彼女は、「私には私の生命・人生の方が大切だったのです」[p. 12, 1. 50-p. 13, 1. 1] という判断を下すわけだが、ぼくたちはここに〈個人志向の萌芽（その1）〉を読み取ることができるだろう。入院生活はまた彼女に〈個人志向の萌芽（その2）〉と〈個人志向の萌芽（その3）〉として位置づけることのできる2つの貴重な負の体験を生み出すことになった。一つは、入院生活を始める時も入院中も彼女は「何もかも自分だけでやらなければならなかったのです」[p. 13, 1. 26] という状態で、これに対応して《だれ一人として私を助けてくれなかった》という思い [cf] p. 13, 1. 26-1. 28] を強く持つことになる。ここで彼女が《だれ一人として私を助けてくれなかった》と言う場合、彼女が直接的に念頭においていたのは、彼女の周囲にいた「同国出身者」[p. 13, 1. 27] のことだが、彼女が結婚していたという点を考慮に入れるなら、彼女の脳裏には遠いトルコの地で何もしてくれない彼女の夫のことも浮かんでいたと見て間違いないだろう。もう

一つは、「私は独りぼっちで誰もやってこない」[p.13, l.49] というものだ。この2つの負の体験は、《頼れるものは自分だけしかいないじゃないか》という実感的認識を彼女に植えつけたように思われる。こうした心的状況の中で彼女の《故郷への憧憬》はその強さを増していき、「私、無性に故郷に帰りたいかったの」[p.14, l.16] という思いにつき動かされる形で、彼女は《第2の決定的な動き》をすることになる。それは、「まず初めに、夫のもとにではなく母のもとに帰っていく」[p.14, l.29;l.33] ということだ。この動きによって、彼女自身の《故郷への憧憬》の方は満たされることになるのだが、これはまた「彼女の夫とその家族からすれば侮辱されたと感じさせられる」[p.14, l.37-l.38] 行為であったが故に、離婚の方向へと踏み出していく決定的な動きとなってしまった可能性が大きく、これ以降、それ以前からあったと思われる夫との構造的対立はさらに深刻なものとなっていったようだ。

第4局面:《ドイツ定住決意後》局面

ドイツに留まりながら生きていくことを決意した後、彼女は3重の意味で《積極的に打って出る》という姿勢を固めたように見える。第1は、《労働法廷での闘い》の動きとして現れている[p.15, l.34-l.35]。この、自分の労働条件について主張していこうという動きが彼女にとって新しい始まりを意味したことは、「私はこうしたことすべてを私一人でやらなくてはなりません。経験を積まなくてはなりません」[p.15, l.35] という発言からも明らかである。第2は、言葉のハンディキャップを克服するための動きである。彼女はテレビを通じてのドイツ語学習[p.15, l.38-l.42]によってこれを実現していく。そして第3は、自力で仕事を見つけ出すという動き[p.16, l.33]である。そこには、「意欲がありさえすれば、何だってできる」[p.16, l.35] というキャッチフレーズを自分に言い聞かせながら、苛酷な労働条件の仕事に歯をくいしばってしがみついている彼女の姿がある。この仕事は、5カ月後、「いや、私にはこれはできない」[p.16, l.43]という言葉をもって幕を閉じられることになるものだ。

3. ヒュルヤさんの内省的思索群

ここでヒュルヤさんの内省的思索群と呼んでいるのは、17頁の39行目から始まる最後のセクションでの彼女の発言のことである。このセクション、つまり1.での時期区分に従えば第5b期と呼んでいる時期の発言には、大きく言って、相互

に関連しあった次の3つの主題を見いだすことができるように思う。それらは、(1)《どう生きていくのか》、(2)《何が大切なことなのか》、(3)〈トルコとドイツ〉のテーマである。

(1)《どう生きていくのか》というのは、ヒュルヤさんの生き方をめぐる問題群である。

まず彼女をトルコに移住させることになった重要な契機である《「お金」の価値/位置》について言えば、「お金は最後に位置します。でも、お金というものはとても大切です」[p.21, l.35]というのが、彼女の現時点における認識である。

次に「ドイツでの仕事」の価値/位置はどうか、と言えば、「働かなくてはならない時、働かなければならない限りは、ドイツに留まるということになるでしょう。そうできるのなら、それが許されているのなら[、の話ですが]」[p.21, l.38-1.39]ということになる。彼女はここで、トルコに帰っても経済的に独立してやっていけるという見通しがつくまでは何としてもドイツにとどまり仕事をし続けるという選択を行なっているのである。

そうした彼女にとっては、現時点でトルコに帰ることも、いわんや現在のトルコで支配的な女性の生き方に戻ってやっていくことなど考えられない。彼女はそうした意味で〈過去との断絶〉の内に生きている。そうした彼女は、トルコに帰って親戚の中にいても〈お客さん〉感覚をひしひし感じざるをえないし [p.18, l.22]、トルコから出てきた15年前と今とでは全然違うという感覚を強く持たざるをえず、先の引用にもあったように、《もう15年前の自分には戻れない》[p.18, l.31-1.37]。そしてそうした感覚は、〈狭い世間を超えた世界を知ってしまった〉という認識 [p.19, l.18-1.27] によって裏打ちされているのだ。離婚した独身女性でもある彼女はまた、トルコでの独身女性の生きにくさをはっきりと自覚しており、トルコ女性としての〈出口なし〉感覚を共有している [p.19, l.1-1.8; 1.10-1.16]。

それでは彼女はどう生きていきたいのか。基本は、他人のためではなく自分のために生きていきたいというもので [p.22, l.4-1.5]、これは苛酷な人生体験の中から本人がつかみ取ってきた〈生き方の原則〉のようなものである。しかし、そうは言っても、労働条件の不安定さや離婚したトルコ女性としての〈出口なし〉状況に身をさらしているという事情もあって、例えば、「ドイツという[環境]条件の下では、……私はまだとても若いのです。お分かりですよ。ですから、私はまだ、私の人生の初めの局面にいるんです。でも、実感からしますと、……90歳か空虚、何も、何の理想も、何の目的もありません。時々、こんな生活をしているってこと

に何の意味も見いだせないといったことがあります。」(p. 17, l. 45-l. 48) といったふっと口をついて出た発言から推しはかれば、彼女の実存的状況は必ずしも安定したものとは言にくい。時折、押し寄せてくる空虚感/無意味感に襲われることがあると見た方がよさそうだ。しかし彼女はまた、《そのうち誰か自分に合うような男性が出てくるかもしれない(出てきてほしい)》[p. 22, l. 1-l. 9] という一種の未来志向をもって生きている彼女でもある。

次は(2)《何が大切なことなのか》という主題である。彼女が大切に考えているものは3つあると言っている。

一つ目は、すぐ前に(1)の《どう生きていくのか》という主題との関連で指摘しておいた《自分のために生きていきたい》という思いである。二つ目は、「まとまって一致団結していることの大切さ」で、この価値をバネにして身体的に一番苦しかった時期を何とか乗り切ったことはこれまた先に見た。そして三つ目は、《故郷(home)》というものである。

ここでは、《故郷》という言葉に関わる彼女の錯綜した発言に留意しながら、ヒュルヤさんにとっての《故郷》というものの意味を考えてみることにしたい(なお、《故郷》に関する彼女の発言が錯綜しているというのは、《故郷》との関連で家族の位置づけが微妙に異なる発言やトルコの位置づけが相矛盾している発言などがかいま見られることを念頭においているからである)。

まず彼女には《故郷》への強い憧れがあるということ、いやそれどころか、この《故郷》という情動的イメージにつき動かされると、(重い病気のために医者に遠出を禁じられていたにもかかわらず母たちのもとに帰ってしまう、といった)本人さえも思いもよらないような行動に出してしまうことがあるということは、すでに先に見た。こうした《故郷》への憧れの背後には、どうやら幸せだった幼児期の記憶(思い出)があるらしいことは、「もちろんのことですが、私の心の中にはまだ子供時代のこの美しいイメージがあります。昔の日々のことを夢に見ます。私は過去を生きているのです。」[p. 18, l. 44-l. 46] といった彼女の発言から見て取れる。

それはともかく、《故郷》という主題との関連で彼女がしきりに嘆いているのは、現状ではそうした《故郷》を持てていないということ、しかも——彼女の精神的・心理的状況を推し量る上では興味深いことに——ドイツでもトルコでも持てていないということである。ドイツで《故郷》が持てないのはなぜかと言えば、(おそらく民族差別的日常体験を念頭においているのではないかと推測されるが)自分たちがドイツに属していないということをヒシヒシと感じさせられる日常を生きている

(「私たちはここには属していません」[p. 19, l. 18-l. 19]) からだし、トルコの場合は、と言うと、さしあたりはトルコの自分の家族がバラバラだからである(というか、「トルコに別れを告げるというのはそうでもないですけど、自分の家族に別れを告げるのは非常に辛いものですね」[p. 19, l. 38] といった別の個所での彼女の発言を踏まえるなら、そうした側面が強調されていると言った方が、より正確だろう)。

ただし、ここで、現状でも例外的に《故郷》が実感できる場合、というか、より正確には〈ここが《故郷》だ〉と思いこめる場合があることを忘れてはならない。それは、まず第一に休暇から帰ってきた時のドイツの自分の居住空間である。次は、彼女から見てプラスのトルコの価値が問題になる時である。彼女はこの脈絡で、「でも…故郷は故郷です (〈home is home〉)。つまり、ここドイツで永遠に生活するなどということは想像できないということです」(p. 20, l. 5) と言っているわけだが、ぼくの読みでは、そこで「故郷は故郷です」と彼女が言う場合の《故郷》には《トルコ》も入っているということ、ただしそこで言う《トルコ》というのは、《離婚女性》を排除してしまうような、いわば《現実のトルコ》ではなく、家族関係や近所づきあい、社会としてのまとまりといった〈人間的結びつき (humane connectedness)〉を重視するという意味で例の「まとまって一致団結していることの大切さ」を体現した《想像のトルコ》、幸せだった幼児期の記憶(思い出)の中にしか存在しない《想像のトルコ》なのである。それから、《故郷》が実感できるというところまではいかないが、疎外感を抱かざるをえないらしい嫌いなトルコという国に、それでも時折帰って行く理由としてあげられているトルコの家族も——あるいはゲスト(客人)としてトルコの親戚を訪れる時と言ってもいいが——準《故郷》的位置を占めているとみなせるかもしれない。

以上の検討を踏まえて言えば、彼女にとって《故郷》たりえないのは、《現実のドイツ》、《現実のトルコ》、そして《家族成員の一人として暮らす場合の現実のトルコの家族》であり、逆に《故郷》たりえるのは、《休暇後のドイツの〈わが家〉》と《想像のトルコ》、そして(かろうじて、かもしれないが)《ゲストとして訪れる限りでの現実のトルコの家族》ということになる。

最後は(3)〈トルコとドイツ〉のテーマである。このテーマとの関連で彼女に特徴的な点は、一方で、日常生活場面で微妙な形での民族差別にさらされているという実感をもっているながら [p. 17, l. 39-l. 43], 他方では基本的に「トルコとドイツとの間には質的違いは存在しない」[p. 20, l. 31-l. 41] という認識を持っている

るということだろう。この後者の認識を持っているからこそ、ステレオタイプの発想に対する苛立ちや違和感が生まれてくるのだし [p. 18, l. 5-l. 11], またそうした《トルコとドイツとの連続感覚》を前提にした発想, つまり《トルコはドイツよりひどい状況にはあるがさして違うわけではない》(<worse but not different> [p. 20, l. 31]) というそれなりに冷静な認識の仕方を持つことができるのだと思う。

4. おわりに

世の中には《意図せざる発言》というものがある。本人としては何らそういう意図をもって発言したわけではないのに、読む人が読めばある意図を持ったものとして意味づけることができる, そうした発言のことだ。最後に, 第1期の前半の時期, つまり彼女がドイツに来る以前の時期に彼女自身が行なっていた2つの発言を, そうした意図せざる象徴的発言として紹介する形で本稿を閉じることにした。一つは, 母親がおかれていた状況についての彼女の認識=受けとめであって, 「・・・あの人 [=彼女の母親のこと] は, 父が病気になった時, 事実上, 彼女自身のお金というものも, それから彼女自身の住む家ももっていなかったのです」 [p. 3, l. 44-l. 46] というものである。もう一つは, 「いや, お前はドイツへは行かないんだ。お前はここにいるんだよ。いつか結婚する日がやってくる。そしてお前のダンナがお前の面倒を見なくてはならないことになるんだよ」 [p. 3, l. 49-l. 50] である。こちらは, ドイツに行きたいと懇願するヒュルヤさんに対してそれを思いとどまらせようと必死に説得していた父親の発言である。下線を引いた部分に注意していただければわかるように, 彼女がおかれている現状はまさにこれらの発言の逆の状態だということが見て取れるはずである。

注

- 1) 本稿は1998年7月29日カナダのモントリオールで開催された第14回世界社会学会の第38研究委員会である《伝記と社会》の中の1テーマ部会（「伝記研究をする」のセッション [the Session "Doing Biographical Research"]）で発表された論文（"Transformative Experiences of A Turkish Woman in Germany: A Case-Mediated Approach Toward An Autobiographical Narrative Interview"; ISA [1998: p. 251] にはその要約がある）の基礎となった日本語版にかなりの加筆を行なったものである。このテーマ部会は, バンベルグのオットー・フリードリッヒ大学（Otto-Friedrich-Universitaet Bamberg）のゲルハルト・リーマン（Gerhard

Riemann) 氏が調整役として企画したものである。この企画の大変興味深い特徴と言っているのは、

- ①セッションでの発表者にはリーマン氏が準備した同一のテキスト (“A narrative interview with Hulya, a Turkish woman living in a German city”) があらかじめ配布されていること；
- ②発表者には自分の行なおうとする分析・解釈のやり方の概要について（その具体的な分析手順を含めて）ある程度明らかにすることが期待されていること；
- ③リーマン氏の原案では、発表論文はテーマ部会が実際に行なわれるほぼ1カ月前の1988年6月末までに各発表者の手元に届くように設定されることによって、大会当日には〈workshop〉という形で発表者同士の相互交流が可能になるような仕組みが準備されていたこと；

であった。本稿の前半でばくの開発した事例媒介的アプローチについてその概略の説明がなされているのは、②の事情があるからである。

このセッションに発表者として参加したのは、Kaja Kazmierska (University of Lodz, Poland); Setsuo Mizuno (Hosei University, Japan); Lena Inowlocki (J. W. Goethe University, Germany) & Helma Lutz (University of Frankfurt, Germany); Olga Rodrigues de Moraes von Simson (Universidade Estadual de Campinas, Brasil); Elena Y. Mechtcherkina (Russian Academy of Sciences); Baerbel Treichel (University of Magdeburg, Germany) & Birgit Schwelling (Universitaet Erfurt, Germany) といった人々だったが（大会での発表順; cf) Congress Secretariat [1998: p.202]), ③の約束にもかかわらず、何人かの研究者の発表論文が大会当日にならないと配布されなかったり、セッションの時間が3時間に限られていたという事情も手伝って、ばくの個人的印象では、モントリオールでの実際の研究セッションそのものは、残念ながら必ずしも成功したとは言にくい側面があったように思う。が、企画そのものが大変刺激的なものであったことは確実である。

共通テキストとインタビュー内容について一言しておこう。テキストは初めの2頁がインタビューに至る事情と翻訳・編集にあたっての注記、続いて3頁から22頁までが本文である。各頁は、発言の特定化がしやすいようにという配慮からだと思われるが、49行もしくは50行で各行には通し番号がついている（なお、ドイツ語原文の方は無題で、故 Christa Hoffmann-Riem 氏の “Empirisches Seminar: Zur Situation turkischer Frauen und Maedchen” のためのインタビュー資料 [インタビュー番号: XVI] として準備されている。こちらは、目次と導入コメントとで2頁、本文46頁、インタビュー後の情報1頁となっている）。インタビューの対象者になったのは、Hulyaさんという名のトルコ女性で、金属会社勤務の労働者。インタビュー当時31歳。彼女は1972年17歳の時にドイツに移住している。インタビューは1986年2月6

日、彼女のアパートでドイツ語で行なわれた。インタビューをしたのは、Heike KahlertさんとChrista Noackさんというハンブルグ大学の2人の学生。彼女たちは、故Christa Hoffmann-Riem教授（1990年逝去）の主催していた「トルコの女性や少女たちの状況」に関する演習の参加生である。UCSFのアンセルム・ストラウス（Anselm Strauss）氏にインタビューの中身を読ませたかったから（より詳しい事情は不明）という理由で、研究セッションの企画者であるゲルハルト・リーマン氏がインタビューの英訳を行なっている。

なお、本来なら、分析の対象になった共通テキストを付録のような形で掲載すべきだし、《分析・解釈派》を自認し標榜しているぼくとしても（水野〔1986;p.194〕を参照のこと）ぜひともそうしたいところであるが、近い将来リーマン氏が専門誌（3/12'99と3/15'99付けのe-mailによれば*Narrative Inquiry*の編者と交渉中らしい）に共通テキストとモントリオールの学会に提出した英文の諸論稿を載せられないかと奔走している最中のために、現時点（4/25'99）では著作権の関係で転載を許可することができないとのことなのでインタビューの成果である共通テキストそのものについては、残念ながら公表することができない。

- 2) 〈オープン・コード化〉についての議論は、Strauss [1987: pp.40-64; pp.82-108]; Strauss and Corbin [1990: pp.61-74]; Strauss and Corbin [1998: pp.101-121] を参照されたい。
- 3) 〈オープン・コード化〉については2)の該等箇所を、また〈軸足コード化〉については、Strauss [1987: pp.64-68]; Strauss and Corbin [1990: pp.86-115]; Strauss and Corbin [1998: pp.123-142] を参照されたい。また、こうしたコード化の発想を支えるStrauss氏らの〈Grounded Theory approach〉全般並びにその手法の概略については、水野 [1996: pp.368-372] と森岡 [1999] を参照のこと。
- 4) ぼくの言う《チェックする》には、実は《意味チェック》、《意義チェック》、《素材チェック》、《勘どころチェック》という〈4重のチェック〉ということが含意されているのだが、ここでは素材の料理の仕方という点に絞った議論をしているので、そのうちの一つである《素材チェック》にのみ話を限定してある。
- 5) ここで用いている〈変容体験〉という言葉はぼく的生活体験論の中ではそれなりに重要な位置を占めている。この点については、変容体験のバリエーションについての言及のある水野 [1992; p.359] を参照されたい。

《参考文献一覧》

Congress Secretariat of International Sociological Association, 1998, *Social Knowledge: Heritage, Challenge, Perspectives* (the Program Book for the 14th World Congress of Sociology).

International Sociological Association (=ISA), 1998, *Supplement (182) to Sociological Abstracts* (July 1998), Cambridge Scientific Abstracts.

水野節夫, 1986, 「生活史研究とその多様な展開」, 宮島喬 (編), 『社会学の歴史的展開』, サイエンス社, pp.147-208。

水野節夫, 1992, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(中)－1」, 『社会労働研究』, 第39巻, 第2・3号, pp.342-370。

水野節夫, 1996, 「調査研究プログラムとしてのデータ対話型理論の可能性」, グレイザー/ストラウス, 『データ対話型理論の発見』, 新曜社, pp.368-376。

水野節夫, 近刊予定 (1999年中), 「ある少女の日記に見る《生》の軌跡」, 見田・長尾・杉浦編, 『社会学の古典と現代日本社会 (仮題)』, ハーヴェスト社。

森岡崇, 1999, 「グラウンデッド・セオリーをめぐって」, ストラウス/コービン, 『質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリーの技法と手順——』, 医学書院, pp.275-289。

A.Strauss, 1987, *Qualitative Analysis for Social Scientists*. Cambridge University Press.

A.Strauss & J.Corbin, 1990, *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*, Sage.

A.Strauss & J.Corbin, 1998, *Basics of Qualitative Research: Techniques and Procedures for Developing Grounded Theory*. Sage.